

# 東京都写真美術館のワークショップ

暗室での現像体験の意義

東京都写真美術館 インターン

徳本宏子

# 東京都写真美術館の ワークショップ

暗室での現像体験の意義

徳本宏子

## はじめに

美術館の教育普及活動には大きく分けて、実技と鑑賞という二つのアプローチがある。

具体的には、実技についてはワークショップ、鑑賞についてはギャラリートークなど作品解説、アーティストトークのほか、セルフガイドやワークシートの配布などがある。ワークショップは実技、技術を教えるための講座ととらえられがちだが、ワークショップも鑑賞教育も美術作品をより深く理解してもらうためのもの、というねらいでは共通している。

ここでは暗室作業を含むワークショップを通して、東京都写真美術館の教育普及プログラムの中から、写真作品を理解することとは何かについて考察する。

## I. ワークショップの概念

まず、「ワークショップ」という言葉の意味を明確にする。

### ワークショップ [workshop]<sup>❖1</sup>

1. 仕事場。作業場。
2. 参加者が専門家の助言を得ながら問題解決のために行う研究集会。
3. 参加者が自主的活動方式で行う講習会。

一方で、美術館の現場では、ワークショップという言葉は「美術館の教育普及活動に使われ一つの代表的な活動名称となっ<sup>❖2</sup>て」おり、「基本的には『複数の人々が場所とテーマと時間を共有して、能動的な視線を獲得するための方法論』<sup>❖3</sup>と解釈されている。

つまり、美術館でのワークショップは、学校で受けさせられてきたような、教師と生徒のような教授する側／学習する側といった二つの立場が明確で受動的な一方向的な教育・学びの場とは違い、ワークショップを受ける人が主体的に参加し、そこで示されるテーマに対する自己意識を確認し、それを発展する機会を得る場だといえる。一見、ワークショップで技法を教えるというと、一方的に情報を伝

❖1 小学館大辞泉編集部編「大辞泉 増補・新装版」小学館、1998年、p.2840

❖2 降旗千賀子「ワークショップ——日本の美術館における教育普及活動」、『Fuji Xerox Art Bulletin』第3号、富士ゼロックス株式会社、2008年、p.17

❖3 同上

❖4 同上

❖5 同上

授する、「つまり美術館側から参加者、来館者へ」<sup>❖4</sup>という一方的な関わりのように見受けられるが、実際は双方向的であり、「参加者と講師、スタッフがテーマと時間を共有することによって、能動的な思考を刺激し、新しい価値観を生み出していくという活動」<sup>❖5</sup>こそが、美術館でのワークショップなのである。

## 2. 東京都写真美術館でのワークショップ

東京都写真美術館では開館 10 周年目の 2006 年、福原義春館長が考える写真美術館のミッションとして以下のように掲げている。

❖6 「東京都写真美術館年報 2012-13」東京都写真美術館, 2013 年, p.7

わが国唯一の写真・映像の総合美術館として、センター的役割を担う存在感のある美術館を目指します。<sup>❖6</sup>

❖7 同上

<写真・映像文化の普及と新たな創造を支援する美術館>  
美術館での体験を通じ、写真・映像の技法や表現に関する理解を深めるとともに、新たな文化創造を支援する刺激のある場とします。<sup>❖7</sup>

ここからワークショップは展覧会とともにミッションを実現するための大きな柱の一つであることがわかる。インターンとして在籍していた 2013 年度も、写真・映像に関する様々なワークショップを二ヶ月に一度以上のペースで行ってきた。本稿では、その中でも写真を理解するための最も基本的な暗室技法講座と位置づけられている「モノクロ銀塩プリントワークショップ」の内容を紹介する。

### 2-1. 「モノクロ銀塩プリントワークショップ」内容紹介

「モノクロ銀塩プリントワークショップ」はモノクロ銀塩プリントの基本である暗室での引き伸ばし作業から印画紙の現像までを一通り経験する、およそ 3 時間のワークショップである。2013 年度は 6 月 22・23 日、9 月 21・22 日、11 月 30 日・12 月 1 日（東京都写真美術館友の会会員限定）、2014 年 3 月 15・16 日、各日午前・午後 2 回の計 16 回開催した。当館では、引き伸ばしに使用するネガの媒体の違いによって、銀塩ネガフィルム方式とハイブリッド方式という二つの方式で呼んでいる。

銀塩ネガフィルム方式—フィルムカメラで撮影したネガ（モノクロを推奨するが、カラーネガでも可能）を参加者が持参し、焼き付けをしたい 2、3 カットを選び、引き伸ばし機を用いてモノクロ銀塩プリントを行う。

ハイブリッド方式—デジタルカメラや携帯電話のカメラで写真を撮る人も暗室でのモノクロ銀塩プリント体験ができるように 2012 年度から新設したコース。参加者が持参したデジタル画像データ（2 カット）からインクジェットプリンターで出力したデジタルネ

ガフィルムを使い、モノクロ銀塩プリントを行う。ネガの制作は当館スタッフが担当し、参加者には暗室でのプリントを体験してもらうことが目的のワークショップである。(注：参加者にはネガ作りのためのパソコン上でのデータ処理方法を記したハンドアウトを配布する) [図 1]

その他、モノクロ銀塩プリントを体験できるワークショップとして、フォトグラムのワークショップを2013年度は4回行った。東京都写真美術館では、ワークショップの運営を教育普及担当学芸員が行い、参加者の実技サポートをワークショップ助手、美術館インターン、普及係アルバイト、そして登録ボランティアが美術館スタッフとして参加者を補助する。

モノクロ銀塩プリントを行うすべてのワークショップで、最初の45分程度は実技レクチャー担当スタッフによる暗室作業の説明になる。暗室に足を踏み入れたことがなく、引き伸ばし機を初めて見る参加者も多いので、非常に重要な一歩である。また、過去に暗室作業経験のある参加者にも、当館での暗室の使い方のマナーを知ってもらうことは、参加者同士が心地よく作業するためにも大事である。その間、ネガキャリアにネガを装着するところから、引き伸ばし機の使い方、設定の説明(F値とフィルター号数、露光秒数タイマーは最初、館が設定した一定値にしておき、その後の作業でスタッフと相談しながら、変更していく旨を伝える)、イーゼルの使い方、ピントの合わせ方、フィルターの意味と装着方法、印画紙を露光させるまでに必要な各機器の設定や方法を一通り説明する。続いて、段階露光の説明、印画紙の現像方法の説明に入る。現像の工程、現像・停止・定着の各薬液が入ったバットへの印画紙の浸し方、竹ピンでの紙のつかみ方、竹ピンは液ごとに必ず持ち変えること、暗室時計の見方、各液につける秒数への留意、そして暗室への出入りへの留意まで、一気に説明する。[図 2]

ここまでの説明は、暗室内で引き伸ばし機を前に、蛍光灯を点けた状態で行うが、ここでようやく暗室灯だけの暗い部屋にし、美術館スタッフが傍で見守る中、実際に参加者が引き伸ばし機に触り、引き伸ばし機の高さ調整、ピント合わせを行うことからいよいよ現像体験がはじまる。

参加者には一斉に各自作業に取り組んでもらい、時間の許す限り、ひたすらプリントする。暗室と明室の往復である。実際に段階露光を行い(最初は特に参加者一人ひとりを作業工程に誤りがないかスタッフが見守っている)、印画紙を現像し(現像プロセスをアドバイスするスタッフが暗室内には数名常駐している)、暗室を出た後は、プリントにアドバイスを担当のスタッフが参加者と一緒に出来上がったプリントを見ながら、一人ひとりに次のプリントを



図 1  
ハイブリッド方式、デジタルネガ出力風景



図 2  
暗室作業説明の様子



図3  
参加者と一緒に出来上がったプリントを鑑賞する

どうするかアドバイスをする。その際、スタッフが一方的に参加者に指示をするのではなく、「どのように仕上げたいですか?」「こういったプリントが好きですか?」「この写真のどこを一番見せたいですか?」ということを必ず聞き、参加者自身が実現したいプリントを制作できるように、露光時間・フィルターの調整、覆い焼きのやり方など、具体的な暗室技法のアドバイスを行っている。参加者が迷ったときに適切なサポートができるように、今回のワークショップで参加者が実現したいことを把握しながら、美術館スタッフは側で見

守っている。【図3】

2時間半に及ぶ暗室作業の後、最後に参加者と美術館スタッフ全員が集合し、一人ずつに本日ベストのプリントについて、現像体験の感想を述べてもらう時間を設けているが、一見失敗したプリントでも、何かを気づくきっかけになったと選ぶ人もいる。知らない者同士で集まって他の人の作品を鑑賞し、それについて発言したり、自分の作品を誰かに見せ、フィードバックを得たりする機会は、暗室経験者でも滅多にないため、これも新しい経験になる。その際、多くの参加者はまずその写真をどこで、どのように、どんな気持ちで撮影したのかといった、被写体への思いを語ることが多い。旅先で撮った風景、日常で撮られたスナップショット、身近な人やペッ



図4  
感想を述べ合う参加者とスタッフ

トのポートレートなど、たくさんあるネガのコマやデータから数コマを選ぶ作業のなかで、「自分でこれをプリントしたい」と望む選択の背景には被写体への愛情や思い入れがあり、語らずにはいられないのだろう。その後、暗室作業の上手くいった点、難しかった点などの話になる。ネガの状態や参加者の求めるプリントの方向性により暗室での作業は異なってくるので、自分がやらなかった暗室技法や、銀塩プリントの知り得なかった奥深さを知る非常に良い機会になる。それは参加者のみならず、私たち美術館スタッフにとっても非常に刺激的で良い勉強になる。その間は、各々集中

して作業していた参加者同士が、お互いの技法やできあがった写真についてフランクに話す非常にリラックスした時間となる。【図4】

## 2-2. 参加者からのフィードバック (アンケートより)

ここでは、実際の参加者からの反応を、各ワークショップの最後に記入してもらうアンケートを元に見てみたい。

モノクロ銀塩プリントワークショップに関していえば、当館でのワークショップに初めて参加するという人が多く、導入的な側面が高いと言える。参加者は都内全域、近郊各県(神奈川、埼玉、千葉、群馬、茨城)から来る人が多い。年齢層は、30代、40代が多い傾向にあるが、毎回10代後半から60代以上まで幅広く応募がある。



世代別の参加動機の傾向として、20代は「最近写真を始めたので」<sup>❖8</sup>、「フィルムで撮り始めたので」<sup>❖9</sup>という動機が多い。50代以上になると、「昔撮影したネガから久しぶりにプリントをしたかった」<sup>❖10</sup>という意見が出てくる。そのような参加者に話を聞くと、普段はラボやプリンターにまかせ、出来上がったプリントを吟味する、あるいはフィルムスキャンしたものをコンピューターの画面で見ているということが多いそうだ。最も多い参加動機は、「撮ったことはあるが、自分でプリントした事が無かったから」<sup>❖11</sup>である。特に30代を中心にして多く、自分で撮った写真を（あるいは、昔、家族が撮影したというような何か思い入れのあるネガから）自分の手でプリントしてみたいという意識が強い。アンケート結果によると、どの参加者も暗室作業の体験として、内容の満足度が非常に高い。およそ3時間、作業中ずっと立ちっぱなしのワークショップであるにも関わらず、参加者や美術館スタッフも、皆時間が経つのも忘れ、ひたすらにこの日目指す写真作品をつくろうと一生懸命なのである。その他、「これからも暗室を借りてやってみたい」<sup>❖12</sup>とか、「あの写真作品にも同じ暗室技法が使われているのですね」<sup>❖13</sup>といった感想もあった。

このように、当館のワークショップでは、現像体験のみならず、他の参加者が制作した作品を鑑賞し、人前で自分も作品を発表しフィードバックを得られる。それらを通して、モノクロ銀塩プリントの工程を、自分が撮影、プリントした写真のみならず他人が制作した写真も含めて、より身近に感じることができる。それによって今後参加者が写真作品を鑑賞する視点が変わること、そして、より深く理解しようとする事、それを東京都写真美術館のワークショップは目標に定めている。モノクロ銀塩プリントという写真作品制作のプロセスを体験し、自分で制作したたくさんの写真作品の中から一つの作品を選び人前で発表することは、写真作家、アーティスト、プリンターなどの制作者と同じ経験をし、彼らと同じ目線に立つということであり、これによって参加者は新たな作品鑑賞の視点を獲得している。そしてワークショップが終了した後も、参加者が主体的、能動的に自分の写真作品、あるいは他者の写真作品と積極的に関わる事、それが写真作品の美術的価値を理解することに繋がるのである。

### 3. 「写真作品を理解すること」とは何なのか？

写真は多角的観点から理解することができる。撮影、暗室作業、プリンティング、写真作品を鑑賞すること、カメラ等撮影機器に凝ることも写真制作・作品への理解である。作品鑑賞という面から見ただけでも、美術的価値、歴史的価値、ドキュメント性、作家性など、様々な観点がある。その中でも特に写真作品の美術的価値は一般的にあまり認知されていない。それには三つの理由があると考えられる。それは「写真撮影行為の安易性」と「写真の情報としての氾濫」と「写真作品制作と機械への依存性」である。

カメラ、フィルムの性能、デジタル技術の向上、携帯電話のカメラ

❖8 「2013年6月22日 モノクロ銀塩ワークショップ（銀塩ネガフィルム方式）アンケート集計結果」より。

❖9 同上

❖10 同上

❖11 同上。「ふだんフィルムで撮影しているが自分でプリントをした事がなくどうしても自分でやってみたかった」、「普段ネガフィルムでお店で現像してもらっていますがプリントを自分でやってみたくらいと思い参加しました」など、多数の感想があった。

❖12 同上。「普段はPCでフィルムスキャンして『画面で見る』だけのことが多いので自分の手で印画紙に焼き付けるプロセスがとても楽しかったです。[……] 今後貸し暗室などでそれらのプリントもやってみたく感じました」

❖13 「2013年6月23日 モノクロ銀塩ワークショップ（ハイブリッド方式）アンケート集計結果」より。「色々課題がわかり勉強になりました。また、他の方がどう操作してプリントしているかを学びました」

ラ機能など、誰でも簡単に写真を撮影することが可能になり、今や写真は我々にとって身近な「道具」である。その「シャッターを押せばすぐ撮れる」という安易性と大衆性が「技術がなくても誰でもできる」と解釈されるため、芸術創作活動として認知されにくいのかもしれない。しかし、「シャッターを押すこと」＝「撮影すること」だけが写真作品の制作でないことを、鑑賞者は忘れがちである。カメラのシャッターを押すことは、写真作品制作ではない。そこからプリントするネガの選択、暗室作業などのプロセスを経て、鑑賞者の前に作品として提示され、彼らに主体的に評価されることによって初めて写真作品となるのである。同時に、情報化社会の中で氾濫している写真は一つの「データ（消費される対象）」に過ぎない。しかし、それはあくまで「情報（道具）」としての側面であって、そこから一步踏み込んで、その美術的価値を理解することとは違う。また、確かに他の芸術活動に比べてカメラ、引き伸ばし機等、機械に頼る部分が多い。そのため、他の芸術活動に比べて「手仕事」的要素が少ないと、写真を美術に含めないという立場もある。だからこそ、撮影の先のプロセスを実際に体験できる、暗室作業を含むワークショップに参加したり、美術館に来館して実際のプリントを目の前にすることは、とても有意義な経験であると言える。ワークショップを通じて、参加、体験し、他人と分かち合うことで、何かと「敷居が高い」と言われる「美術」や「美術館」をより身近に感じられていることも事実である。

モノクロ銀塩ワークショップに参加し、暗室での作業という体験を通じて制作者と同じ目線に立つことは、非常に有意義な視点を獲得している。そして参加者が主体的、能動的に写真と関わること、それが写真作品の美術的価値を理解することである。被写体の価値、ドキュメント性や時代性、作家の知名度のような、写真作品の情報の側面だけでなく、プリントそのものの価値を見極める。そうすると、美術館も、より鑑賞者独自の視点で理解し、楽しめるのではないか。美術館は美術作品を観て、知識を一方的に与えられる場、だけではない。そのことをワークショップに参加することは体験的に来館者に伝えている。